

## 古酒と革袋——メルヴィルの旧世界探訪記

星野 勝利

If I do not go, I am confident that hereafter I shall upbraid myself for neglecting such an opportunity of procuring “material.”

--Melville, *Journal*, Dec. 16, 1849

## はじめに

1849年、30歳のメルヴィル(Herman Melville, 1819-91)は、ニューヨークからイギリスへ向かう。19歳で大西洋を往復し、二十代前半の数年在太平洋の島々で過ごしたメルヴィルにとって、この航海は三度目の海行きであった。ほぼ十年ぶりのイギリス上陸を前にして、メルヴィルは携行した手帳に、その時の高揚した思いを記す。

*Sunday Nov 4* ....This time tomorrow I shall be on land, & press English earth after the lapse of ten years -- then a sailor, now H.M. author of “Peedee” “Hullabaloo” & “Pog-Dog.” (12) <sup>1</sup>

高揚したことばの背後には、十年間の時間の経過とその間の環境の変化が透けて見える。十年前に商船ではじめてニューヨークとリバプールの間を往復した時、メルヴィルは未だ一介の水夫でしかなかった。しかしその水夫も、いまでは三つの作品を世に送った一人の作家となっている。作品の名前『タイビー』(1846)『オムー』(1847)『マーディ』(1849)は、ここではあえて戯画化されている。しかし、ことばの端々には、時間の経過と立場の変化への熱い思いが滲み出る。海行きのもたらす精神作用の大きさをかいま見ることでもある。

三度目の海行き、そしてアメリカの若き作家としてのこの旅は、メルヴィルにとって、どのような意味を持つものであったのか。

## 1 若きアメリカ

若くして世に出た天才詩人ビエール。恋愛詩「熱帯の夏」で一世を風靡するアメリカの若き詩人ビエール・グレンディニングは、文壇重鎮のお墨付きもあり、我が世の春を謳歌する。講演依頼が次々と舞い込み、編集者、出版業者、挿し絵

画家、筆跡蒐集家も群がる。しかし、何の苦労もなく文壇の寵児となったビエールは、やがて絶望と苦悩の世界へ突き進む。「甘美な夏は終わり、秋も過ぎていったが、さながら厳しい冬のように、本が書き上がることはなかった」（『ビエール』巻22）という世界である。書きたいものが書けず、机に向かって呻吟するビエールをよそに、季節の変化のみが、むなしく時を刻んでいく。

イギリスに向かう作家メルヴィルの姿は、メルヴィル自身の作品『ビエール』（1852）の作中作家ビエールを彷彿とさせる。南海体験の作品で世に出たメルヴィルと同様、ビエールもまた詩「熱帯の夏」で世に出る。ただし、イギリスに向かうメルヴィルは、ビエールと異なり、作家としての地獄に迷い込むことはない。この時すでに三つの作品を送り出していたメルヴィルは、更に二つの作品『レッドバーン』（1849）と『ホワイト・ジャケット』（1850）を短期間で書き上げて、そのうちの一つ『ホワイト・ジャケット』の校正刷りを手に、イギリスに向かっている。メルヴィル30歳の秋である。

10月11日、ニューヨークを発ったメルヴィルは、約4週間の航海の後、イギリスに上陸する。ロンドンに3週間ほど滞在した後、パリに向かい、約10日間過ごした後、ブラッセル、ケルンを経由して、ライン川とモーゼル川の合流地コブレンツに至る。そこから再びロンドンに戻ったメルヴィルは、さらに10日間ロンドンで過ごし、クリスマスを前にして、ロンドンからニューヨークに向かう。初秋の10月、ニューヨークを出て、翌年1月末、厳冬のニューヨークに帰港するまで、約4ヶ月間の旅であった。

メルヴィルは、知られる限り、日記を残していない。個人的体験を語ったとされる『タイビー』や『オムー』についても、日記的資料は残されていない。物語を通して体験をたどるのみである。ところがこの旅に関しては、メルヴィルは記録を残す。旅の模様を記した『日誌 1849-50』（*Journal 1849-50*）である。

アメリカ的なものとして日記と自伝が指摘される。生活に倫理性を求めたピューリタンは、植民地時代以来、日記と自伝に親しんだ。マイケル・ウィグルズワース、コトン・マザー、ジョン・ウールマンなど、ピューリタンの先達による日記は少なくない。この伝統は、フランクリンの『自伝』にも、エマソンの『日記』にも、ホーソーンの『ノートブックス』にも、確実に受け継がれていく。

いわゆる日記には、基本的に二つのタイプがある。内省的な思いを記録する「日記」(diary)と、日常的事実の記録を中心とする「日誌」(journal)である。実際には、この境界線はそれほど明確ではない。むしろ曖昧であり、双方を兼ねたものも少なくない。日記あるいは日誌には、ピューリタンの場合、大別して三つの種類がある。旅行記風のもの、備忘録的なもの、そして内省的なものである（福

田、29-45)。

この分類に当てはめると、メルヴィルの記録は、基本的に「日誌」である。起きたこと、出会った人、目にしたもの、食べたもの、飲んだもの。これらをこまめに記した一種の備忘録である。たとえばロンドンに入った日、メルヴィルは、こう記す。

*Tuesday Nov 6<sup>th</sup>.* Swallowed a glass of ale, & away for the R.R. Station, & off for London, distant some 80 miles. Took the third class cars--exposed to the air--develish cold riding against the wind. Fine day--people sociable. Passed thro' Penshurst (P.S.'s place) & Turnbridge (fine old ruin there). Arrived at London Bridge at noon--crossed at once over into the city, & dinner at a chop-house in the Poulterey--having eaten nothing since the previous afternoon. Went on passed St Paul's to the Strand to find our house. They referred us elsewhere, being full. Secured rooms at last (one for each) at a guinea & a half per week. Very cheap.... (13)

移動前に飲んだもの、移動したルート、距離、汽車、天候、人々のようす、通過した場所、到着のようす、夕食、宿さがし、宿泊代金。短い記述の中に、これらが詳細に記される。これが特殊なものでないことは、パリの一日を見てもわかる。パリ滞在五日目、メルヴィルは次のように一日を過ごす。

*Saturday Dec 1<sup>st</sup>.* Coffee & roll at 10 1/2 at Cafe over the way. At 11 A.M. Adler called & we started for the Hotel de Cluny. Stumbled upon the Sorbonne, & entered the court. Saw notices of Lectures --Cousin &c.--Hotel de Cluny proved closed. Took buss & went to Pere le Chaise. Fine monument of Abelard & Heloise. tombs of generals &c. Returning, visited Abattoir of Popincourt. Noteworthy place, founded by Napoleon. Old woman &c. Thence to the Boulevards & thro them to Rue Vivienne to the Bourse & Livingston & Wells'. Dined with Adler at the "Rosbeef" & thence to his room in Rue de la Convention. At 7 1/2 p.m. left for the Palais Royal to see Rachel in Phedre. Formed in the "cue" in the arcade--stood an hour or two & were cut off. Returned bitterly disappointed to Adler's room,--bought a bottle of Bordeaux( price 8 sous) & drank half a glass

of it. Home at 11 & to bed. (31-2)

十時半に朝食を取り、11時にアドラーとクリュニー館に向かい、途中ソルボンヌに立ち寄り、構内を見学する。クリュニー館は閉館中のため、馬車でペール・ラ・シェーズの墓地に向かい、アベラールとエロイズの墓を見学。そこから戻ってナポレオン建立の賭殺場を訪ね、大通りへ向かう。アドラーと夕食を食べ、一旦彼の宿にもどった後、7時半にバレ・ロワイヤルの『フェードル』観劇に出かける。一時間半待たされた上、入場できず、落胆してアドラーの宿に戻り、ワインを飲み、11時にホテルに帰り、就寝。これがこの日の行動である。日記と言うよりも、まさに日誌である。朝食はコーヒートロールパン、昼はビーフ、夜は8スーのボルドーワインを購入し、グラスで半分飲んで床についたことまで、手に取るようにわかる。

この記録を、たとえばホーソーンの日記と比べると、その違いが際だつ。領事としてイギリスに赴任したホーソーンは、その間の記録として『ノートブックス』（1868, 1870, 1871）を残している。1856年11月20日の日記は、メルヴィルの訪問（現在のイギリス訪問の7年後に行われるもの）を記したものである。これを記すホーソーンの様子は、次のようなものである。

*November 20<sup>th</sup>, Thursday.* A week ago last Monday, Herman Melville came to see me at the Consulate, looking much as he used to do (a little paler, and perhaps a little sadder), in a rough outside coat, and with his characteristic gravity and reserve of manner....Melville, as he always does, began to reason of Providence and futurity, and of everything that lies beyond human ken, and informed me that he had “pretty much made up his mind to be annihilated”; but still he does not seem to rest in that anticipation; and, I think, will never rest until he get hold of a definite belief....He can neither believe, nor be comfortable in his unbelief; and he is too honest and courageous not to try to do one or the other. If he were a religious man, he would be one of the most truly religious and reverential; he has a very high and noble nature, and better worth immortality than most of us. (Horsford, 628-9)<sup>2</sup>

ホーソーンはメルヴィルの精神的状況を実によく捕捉している。この時期のメルヴィルは精神的に苦境にあった。作中作家ピエールの状況にあった。『白鯨』

(1851)『ピエール』『イズラエル・ポッター』(1855)『詐欺師』(1857)そして短編と、次々と書き上げていった作品は、世間から無視された。この時のイギリス訪問はこのような状況の中で行われたが、訪問を受けたホーソーンは、自己破滅のことまで口にするメルヴィルが、「信じることもできず、不信の中で安らぐこともできない」不安定な状況にあることを、鋭く見抜いている。

しかしこの観察は、実はこの日の記録の一部でしかない。この日の記録は、全体的には、この十倍はある。その中でホーソーンは、メルヴィル訪問のこと、リバプールやチェスターを訪ねたこと、旅の次第などを、詳細に述べている。その冒頭の一部がこの観察である。量といい、内容といい、日誌というよりも、やはり日記である。ピューリタンの伝統の影も否定できない。

これに較べると、メルヴィルの記録はいかにも事務的である。事実の羅列である。しかしこれはやむを得ないものでもある。旅の目的は、経済環境を安定させること、そのために、短期間で書き上げた作品(『レッドバーン』と『ホワイト・ジャケット』)を、アメリカだけでなく、イギリスでも出版すること、そのために交渉を行うこと、すなわちビジネスであった。ロンドン滞在中、この交渉にメルヴィルは連日追われる。しかもその交渉は、版權問題がからみ、順調には進まない。必然的に、日々の記録の中に事務的ことがばか増えていく。

ただし、かつての海の放浪者として、旅そのものへの関心がメルヴィルになかったとは思われない。旅を前にして、ヨーロッパ旅行の先達ペイヤード・ティラーとメルヴィルは会っている。ティラーの旅の本も何冊か手に入れている(Hayford, 252-3)。イギリスに向かう船上では、そのティラーの従兄弟フランクリン・ティラーと乗り合わせ、ともに大陸へ向かう計画も立てている。後にメルヴィルは、旅をテーマとした講演の中で、健康な生活のためには「変化」と「新奇」を欠かすことができないという趣旨のことを述べる(Sealts, 185)。ビジネスの旅の中でこのコンセプトが忘れられたとは考えにくい。

他方メルヴィルは、内面的世界にも時には深く沈潜する。たとえば、ロンドンで3年前に客死した兄ガンスヴォートの知人と会った日。その日の深夜、メルヴィルは、「2年前、いや3年前、いま部屋の中でただ一人深い沈黙の中にいる自分と同じように、兄もこのロンドンで、いまとちょうど同じ時間に、手紙を書いていたのだ。この静けさ、どう言えばよいのだろう。高度の神秘的な世界への入り口、古代ギリシャの人たちがそう考えたのも無理はない」(11月24日)と記す。夜のロンドンの沈黙の中、思いを馳せるのは、古代ギリシャの神秘の世界である。後にメルヴィルは『ピエール』の中で、「沈黙」(サイレンス)について分析する。誓いの言葉を口にする前に花嫁を訪れる沈黙、キリストが生をうけた時に訪れた

沈黙、旅立ちの日に旅人の心を襲う沈黙、そして「神の唯一の声」としての「沈黙」(巻14)。分析がたどり着く地平は、宇宙の構成原理である。内的世界への沈潜の最たるものといってもよい。

この種の沈潜も、この旅は時として招来するものであった。これを語ってくれる日誌は、小なりとはいえ、資料としては貴重である。

## 2 紐帯を求めて

メルヴィルの作品では濃密な人間関係がしばしば現れる。たとえば、イシュメイルとクイークエッグ。『白鯨』冒頭で形成される二人の関係は、きわめて強固である。一方はキリスト教文化を受け継ぐ白人の青年、一方は南の海からやってきた偶像崇拜の異教徒。しかし二人は、まるで「シャム双生児」(72章)のように、太い紐帯で結ばれる。イシュメイルがただ一人難破から逃れることができたのは、クイークエッグが用意した棺がブイの役目を果たしたからである。二人の関係は生死をも越えるまでに深い。

類似の関係は、捕鯨船ピークオッド号に蜘蛛の糸のように張りめぐらされる。三人の異教徒(タシュテゴ、クイークエッグ、ダグー)は、「悪魔の名において」エイハブ船長と「契り」(113章)を交わす。拝火教徒フェダラーは実体と影を結ぶ「くびき」(130章)のようにエイハブに付き従う。狂気の黒人少年ピップは、船長エイハブと「心の琴線で織った紐」(125章)で結ばれる。かくして、作品『白鯨』は、鯨と人間の物語であると同時に、人間と人間の物語、とりわけ、その関係性の物語、それも、この上なく濃密なものとしての人間関係の物語である。旅人メルヴィルの場合はどうであったか。

紹介状が大きな役割を果たしていた時代。旅立つ前のメルヴィルの行動は、このことを強く示唆する。旅立つにあたってメルヴィルは、妻エリザベスの父である岳父マサチューセッツ州司法長官レミュエル・ショーに、手紙を送っている。ボストンの有力者に招待状作成を依頼していただけないか、と要請するものである(Metcalf, 64-68)。カーライル宛のエマソンの紹介状はおそらく手に入れることができなかったが、結果としてメルヴィルは、『平水夫の二年間』(1840)の著者である先輩作家デйнаから、出版者エドワード・モクソンに宛てた紹介状を手に入れる。ハーバードの学長エドワード・エヴァレットからは、下院議員で詩人のモンクトン・ミルン、詩壇の長老サミュエル・ロジャーズ、駐英フランス公使ド・ボーモン宛のものを手に入れる。加えてメルヴィルは、旧知の文芸誌発行者エバート・ダイキンクや詩人編集者ナサニエル・ウィリスの紹介状も手に入れる。イギリス上陸後も、後から送られてきた紹介状をさらに手に入れる。このような

状況を見ると、当時ヨーロッパの社会に入っていくためには、紹介状がどれほど大きな役割を果たしていたか、その一端を知ることができる。

紹介状執筆者の一人ウィリスは、自分の発行する雑誌の中でメルヴィルのイギリス行きに触れ、この旅は、「イギリス社会の異常なまでに困難な入り口に対するくヒラケゴマ」になるにちがいない」(Horsford, 306)と記している。成功の保証である。理由は、メルヴィルの著書がイギリスで高い人気を得ていること、およびメルヴィルの対話力がきわめて優れていることである。現実はどうであったか。

ロンドン滞在中、メルヴィルは出版関係者と数多く会っている。デイナが紹介したモクソンもその一人である。モクソンとの出会いを記す日誌(11月20日)は、ウィリスのメルヴィル観の正しさを証す。冷淡で素っ気ないモクソンを前にして、メルヴィルは「賢明な話題」を取り上げる。モクソンが好んでいた作家チャールズ・ラムである。この話題が次第にモクソンの胸襟を開かせ、ついにはラムとの逸話やデイナの話まで引き出す。

*Tuesday 20<sup>th</sup>* ...Then walked down street, stopped & learnt the address of Moxon the Publisher. Found him in--sitting alone in a back room--he was at first very stiff, cold, clammy, & clumsy. Managed to bring him to, tho', by clever speeches. Talked of Charles Lamb--he warmed up & ended by saying he would send me a copy of his works. He said he had often put Lamb to bed--drunk. He spoke of Dana--he published D's book here.  
(23)

新参者メルヴィルの涙ぐましい努力である。ウィリスが指摘した「イギリス社会の異常なまでに困難な入り口」を、この時メルヴィルは確実に感じ取ったにちがいない。この日の夕食後、メルヴィルは、駐英米国公使ローレンス夫妻をボンド通りのホテルに訪ねる。異国の「困難な入り口」を目の当たりにしたにちがいないメルヴィルにとって、同国人のこの招待は、こころ安まるものとなったと予想される。実際ローレンス公使は、快活で親切な、気取りのない人物であった。風采も穏やかであり、「とても感じのよい」アメリカ人であった。ところが、同伴のローレンス夫人について、その日の日誌にメルヴィルは、きわめて過激なことを記す。

....But his wife! Such a sour, scrawny, scare crow was never seen till she first saw herself in the glass. I do not fly out at her for her

person--no, but her whole air & manner--God deliver me from such horrors as Mrs. Lawrence possesses for me.--Her skinny scrawny arms were bare--She talked of Lady Bulwer--said that--but there is no telling how she managed so well her veiled & disgusted air, without being at all uncivil or meaning any incivility. She belongs to that category of the female sex, there are no words to express my abhorrence of. I hate her not --I only class her among the persons made of reptiles & crawling things.... (23)

「ひねくれてガリガリに瘦せたカカシ」「神さま、お助け、と言いたいほどのイヤラシサ」「地面を這いつくばるハチュウルイ」。何とも激しいことばである。公使夫人に対するものとしては、異常でさえある。淡々とした記述が多い中で、突然現れるこの激しさは、はたしてどう読むべきものなのか。

ことばから滲み出るのは、一種の嫌悪感である。どうにも抑えがたい嫌悪感。しかしメルヴィルの場合、このような嫌悪感が示されるのは、作品の場合はほとんどない。女性が描かれること自体それ程多くはないが、『タイピー』のイラーや『マーディ』のホーティア、『ピエール』のイザベルやルーシー、あるいは『クラレル』(1876)のルースなど、むしろ女性は、抽象化され、理想化された存在として現れる。

ところが日誌では、事情が少し異なる。メルヴィルは嫌悪の感情を記すことをためらわない。たとえばこの日から三日後、出版者マレーのパーティに招待された時、訪ねたメルヴィルは、パーティの雰囲気のアマリの「堅苦しさ、よそよそしさ、冷たさ」や、召使いの「横柄さ」に、「出席者全員の頭を殴り飛ばしてやりたい」(11月26日)と感じる。あるいは大陸でおみやげ用ブローチを騙されて買った時、宿に帰ったメルヴィルは、日誌に、騙して売った少女について、「そんなにかわいい娘でもなかった---おかげでますます腹が立つ」(12月11日)と記している。客の滞在を引き延ばすために平気で嘘をつく「狡猾な女将やずる賢いボーイ」(12月12日)についても、怒りを込めて記している。

しかしこれらに較べても、ローレンス夫人に対することばの激しさは、並みのものではない。むしろ異常である。あまりの激しさに「女嫌い」(mythogeny)ということばさえ浮かんでくるほどである。これはメルヴィルの女性観との関係で、しばしば提示される問題である。<sup>3</sup> しかしメルヴィルは、夫人と再会後、この部分を自ら削除している(Horsford, 313)。その次第はさておき、書いたことばを削除するメルヴィルを、単に「女嫌い」と規定するのは危険である。



ただし、このような視点で眺めると、日誌で際だつもう一つの特徴が見えてくる。「女嫌い」とは逆に、男の友達とのきわめて親密な関係である。容易に形成される男性との友情である。ロンドンに向かう定期船サザンプトン号の船長は、投身自殺者の出た折りの対応ぶりにより、海の生活に慣れたメルヴィルの不信感を誘う。しかしメルヴィルはこの船長と間もなく親しい関係を築く。知的な紳士ぶりに「これほど人違いしたことはなかった」(11月1日)と、率直に認める。

同じく船で知り合うフランク・テイラーとジョージ・アドラー。すなわち、知人の旅行記作家ペイヤード・テイラーのいとこと、ニューヨーク大学ドイツ語教授アドラー。たまたま同行者となったこの両者とも、メルヴィルはきわめて親しい関係を築く。しかも知的な、密度の濃い関係である。大西洋のまっただ中で、メルヴィルの部屋をに集まった三人は、ウィスキーを口に運びながら、ヘーゲル、シュレーゲル、カント、ラ・ブラースについて語りあう。夜中の2時には、夜の船首にも立つ。

*Monday Oct 22* ....We had an extraordinary time & did not break up till after two in the morning. We talked metaphysics continually, & Hegel, Schlegel, Kant &c were discussed under the influence of the whiskey. I shall not forget Adler's look when he quoted La Place the French astronomer-- "It is not necessary, gentlemen, to account for these worlds by the hypothesis" &c. After Adler retired Taylor & I went out on the bowsprit--splendid spectacle. (8)

親しい関係は、アドラーとの関係において頂点を極める。テイラーと二人で中東を訪ねる計画は、メルヴィルの出版交渉との関係でとん挫するが、代わりにメルヴィルは、アドラーとともに、ロンドンとバリの探索に臨む。互いの宿を訪ね、食事をともにし、二人の旅は、さながら兄弟二人の道行きとなる。帰国後書かれることになるメルヴィルの作品は、哲学的、思弁的色彩を色濃く漂わせる。『白鯨』ではプラトンやカント、運命や自由意志が語られ、『ピエール』でも、プラトンやカント、超絶主義、そして天上時間と地上時間が論じられる。アドラーとの交友の反映をここに見るのは容易である。

ニューヨークへ出航するまでの約十日間、メルヴィルはうれしい知らせに囲まれる。出版者ベントリーからは『ホワイ・ジャケット』出版受諾の知らせが届き、ラトランド公爵からは、ベルボア城への招待状が届く。期待していたベルボア城訪問は、日程との関係で実現することはなかったが、しかしこの時期の日誌

には、その無念の思いとともに、それに勝る夕食会やパーティの楽しさの記述が目だつ。その中には「独身者のパラダイス」(12月20日)ということばも跳び出す。後の作品「独身者たちのパラダイスと乙女たちの地獄」(1856)の題目となることばである。

旧世界周遊の旅は、時に嫌悪と疲れを誘うものであった。しかし、人との出会い、触れあいの中で、パラダイス感覚を招来するものであったこともまた確かである。

### 3 過去と現在

作家ビエールの出自を語る語り手は、イギリスを強く意識する。イギリスへの意識は、アメリカへの意識の裏返しである。語り手によると、君主制の国イギリスからみると、新世界アメリカは、安っぽい大釜の中で煮えくりかえるような「永遠に結晶することのない現在」ばかりである。碑を建てて祀るような「神聖な過去」はどこにも見あたらない。しかし語り手はすぐに反論する。南部農園主の家系を見よ。オランダ植民地荘園主の家系を見よ。その古さ、その由緒正しさは、イギリスのそれに劣ることはない。それどころか、豊かに流れるハドソン川と同じであり、「ロンドンのハイドパークの蛇の小川(サーペンタイン・ブルックレット)とは、較べものにならない」(巻1)。

君主制の国イギリスへ向かうアメリカ人作家メルヴィルは、旅の途上で二つの死を目撃する。出航して3日目、一人の男が海に落ちる。投身自殺者である。船上の船客たちの目の前で静かに沈んでゆくその男の最後の笑顔に、メルヴィルは「衝撃」(10月13日)を受ける。

ロンドンに到着して1週間後、もう一つの死を目撃する。処刑による死である。収税人ジョージ・マニングとその妻の手伝い人が、知り合いを殺害し、死体を隠匿し、その住処から盗みを働いた廉で、公開処刑に付される。処刑の日の朝、テイラーと出かけたメルヴィルは、半クラウンの入場料を支払い、処刑場近くの家の屋上に立つ。そこで、「なんとも驚くべき、恐るべき、ことばにならない光景」(11月13日)を目にする。大聴衆の前で、二人そろって吊られていく悲惨な最期の姿である。聴衆約3万人の中にはディケンズも含まれていたという。

第一の死はともかく、第二の死はいかにもイギリス的死である。あるいは旧世界的な死である。長い歴史を持つ君主制の国イギリスで、このような光景は過去何度繰り返されてきたことか。メルヴィルもおそらくこれを感じていた。イギリス上陸最初の日、ディールの町からロンドンに荷物を送ったテイラーとアドラーとメルヴィルの三人は、そこから18マイル離れた町カンタベリーに向かう。大聖

堂を見たメルヴィルは、「大聖堂はいろいろな意味でイギリスで最高のもの。ヘンリー二世、その妻、そして黒太子（ブラックプリンス）---それにベケット。殺害の醜い場所。美しい回廊」（11月6日）と記す。歴史の中の殺害現場と現実としての処刑の現場。時間的にわずかな間隔をおいて、メルヴィルはこれとともに体験する。

アメリカの現在を意識する『ピエール』の語り手は、イギリスの過去を意識する。イギリスを訪ねたメルヴィルは、ベケットの過去の世界と、公開処刑の現在の世界を見る。ほかにどのような過去と現在を見るか。

ロンドン滞在中メルヴィルは実に精力的に動き回る。出版交渉のかたわら、寸暇を惜しんで人と交わる。街を歩き、劇場を訪ね、大通りを眺め、路地を探り、公園を抜け、博物館に立ち寄り、教会に入り込む。居酒屋に立ち寄ってエール（ビール）を飲み、スタウト（黒ビール）やワインを味わい、時にはステーキをほおぼる。そして夜はパーティや観劇。「早めに就寝」（11月10日）、「1時前に就寝」（11月12日）、「早めに帰り、九時半前に就寝」（11月20日）という日誌のことばが、旅人メルヴィルの精力的な姿を間接的に映し出す。

精力的に動くメルヴィルは名所旧蹟をつぶさに見て回る。ロンドン・ブリッジ、シティ、オックスフォード・ストリート、リージェント・パーク。ナショナル・ギャラリー、ギルドホール、大英博物館、テンプル教会、聖パウロ教会。完成して間もないテムズ川トンネルも見学し、郊外のウィンザー城にも脚をのぼす。

11月26日、ロンドンで知り合った二人のアメリカ人（兄ガンズヴォートの知人の書物蒐集家ヘンリー・スティーブンスとコネチカット生まれの海軍牧師ニュートン）と大英博物館を訪ねたメルヴィルは、そこで、ロンドンの古地図、マグナカルタ、シャルルマーニュ大帝の聖書、シェイクスピアのサインのついたモンテーニュの書（『エッセイ』の英訳本）、古代エジプトやサクソン時代の古文書を見る。帝都ロンドンが発散する歴史と伝統の重々しい世界を、おそらくメルヴィルは肌で感じたに違いない。

*Nov 26 .... At 2. P.M. called for Stevens at Morley's, & went with him & Newton to the library of the British Museum. Endless galleries & three-deckers of books. Saw many rareities.--Maps of London (before & after the Great Fire), Magna Charta--Charlemagne's bible--Shakespeare's autograph (in Montaigne) &c &c &c. Went into the Manuscript room--saw the famous Alexandrian Manuscript & many Saxon M.S.S. of great value. (29-30)*

事物を通して歴史と伝統を直接感じ取ること。メルヴィルはこのことを十分に意識している。ロンドンからパリを経てラインに向かう途中、船便との関係でケルンに一泊を余儀なくされた時メルヴィルは、その遅れを不愉快とは思わない。理由は明快である。「ケルンで泊まらなければならなくなった。しかしこれは全く不愉快というわけでもなかった。破風が重なる古めかしい街---中世やシャルルマーニュの思い出がいっぱい詰まった街---ルーベンスが生まれ、メアリ・ド・メディチが命を落とした街----わたしのような思索の人間には、このような街は、興味の尽きない街である」(12月9日)。メルヴィルはこの街で充実した一日を過ごす。大聖堂を眺め、教会を訪ね、博物館を訪ねる。聖ペテロ教会ではルーベンスの絵(「ディセント・フロム・ザ・クロス」)も鑑賞する。過去と対峙する旅、その典型的な一日である。

しかし全体的に見ると、このような一日は意外に少ない。名所旧蹟への訪問も、そそくさとなされることが圧倒的に多い。大英博物館訪問は「ストランド街の古い店で朝食、その後大英博物館へ---大きな腕と足---ロゼッタ・ストーン---ニネヴェの彫刻---などなど」(11月16日)と記すだけである。テンプル教会も「それからテンプル教会へ-----開いていない---しばらく回廊散歩。開かれて、中に入り、半時間ほど歩き回る」(11月18日)という具合である。素っ気ない記述には理由がある。ナショナル・ギャラリーに立ち寄った時の事情を見ると、これがよくわかる。「12時に町に来るとのベントリー氏のメモ、受け取る。ニューバリーントン・ストリートへの途中、ナショナル・ギャラリーに立ち寄る。ベントリー氏に会う。親切なり」(11月12日)。これがこの日の記録である。ビジネスの合間の探訪、これがメルヴィルの旅の基本的構造である。

このゆえであろうか、歴史探訪は、むしろ現実探訪となる。過去の中に現在を見ることとなる。ウィンザー城を訪ねたとき、はからずもメルヴィルは、女王一行の馬車と出会う。しかしこの時の感想は、君主制の歴史に敬意を払うというよりも、むしろそれを軽く受け止めるという気配のものである。イギリス人になった自分の礼に対し、返礼してくれた女王の表情は「市販のお化粧品をおすすめしたいくらい」であり、「けっこう家庭的でたのしい人のよう」でもあった。しかし、返礼のそぶりもなかった皇太子については、ひとこと「皇太子(プリンス・オブ・ウェールズ) 万歳」(11月22日)と記すのみである。王室への敬意の念といったものは、ここにはほとんど見られない。

あるいはロンドン市庁舎(ギルドホール)訪問。15世紀に建てられた古い市庁舎を訪ねたメルヴィルは、そこで異様な光景を目にする。前日の市長就任式の残飯類に群がる乞食たちの姿である。これを目にするメルヴィルは過去のことは

眼中にない。あるのは、現在のリアルな状況に対する作家的関心である。この日ホテルに帰ったメルヴィルは、「この光景から何かいいものが書けるかもしれない」(11月10日)と、次のように記す。

*Saturday Nov 10<sup>th</sup>. ....Within the hall, the scene was comical. Under the flaming banners & devices, were old broken tables set out with heaps of fowls hams &c&c pastry in profusion--cut in all directions--I could tell who had cut into this duck, or that goose. Some of the legs were gone--some of the wings, &c. (A good thing might be made of this) Read the account of the banquet--the foreign ministers & many of the nobility were present.... (15, italics mine)*

旅から帰って間もなく、メルヴィルは匿名の書評「ホーソーとその『苔』」(1850)を発表する。アメリカの作家ホーソーは、シェイクスピアにも劣らない存在であり、アメリカの作家はこのことを強く意識すべきであるという趣旨のものである。旧世界イギリスに対する一種の文学的独立宣言である。しかし日誌には、このようなメッセージ性は感じられない。むしろ、イギリスの過去の中でその現在の姿をあるがままに身届けるという気配が濃厚である。

メルヴィルがイギリスへ渡る5ヶ月前、ニューヨークで大きな暴動が起きている。イギリスから訪れたシェイクスピア役者マクレディの公演を、ニューヨークの市民が妨害し、その鎮圧のために、市民22人が犠牲になったという大事件である。ニューヨークの下層階級の市民の反イギリス感情が引き金になっておきたものである。この時メルヴィルは、シェイクスピア公演の継続を支持する立場から、帰国を決意したイギリス人俳優マクレディの翻意を求める請願広告に署名している。<sup>4</sup>

イギリス訪問の5ヶ月前、メルヴィルはこのような行動をとっている。見方によってはアングロフィリア的行動である。しかし、処刑を眺め、古文書を眺め、乞食を眺め、女王を眺めて記すメルヴィルのことばには、アングロフィリアでもなく、アングロフォービアでもない、文学者としての冷静な視線が感知される。

#### 4 キマエラの創造

対英独立戦争で英軍の捕虜となったニューイングランドのさる若者が、11月の月曜日のある日、ロンドン・ブリッジの橋の上に立つ。捕虜となった後、運命の変転と波乱の人生を経て、旧世界の大会の喧噪のなかに身を隠すべく、この若

者は、橋の上に立つ。乞食衣装のまま立つこの流浪の男の目の前に、薄汚れたロンドンの街と、ニシンの群のようなその雑踏がうごめく。

It was late on a Monday morning, in November--a Blue Monday--a Fifth of November--Guy Fawkes' Day!--very blue, foggy, doleful and gunpowdery, indeed, as shortly will be seen,--that Israel found himself wedged in among the greatest every-day crowd which grimy London presents to the curious stranger. That hereditary crowd--gulf-stream of humanity--which, for continuous centuries, has never ceased pouring, like an endless shoal of herring, over London Bridge. (*Ishrael Potter*, Ch.24)

メルヴィルの『イスラエル・ポッター』(1854)の第24章は、このような描写で始まる。章のタイトルは「地獄の街で」(In the City of Dis)である。

ところがこの描写は、メルヴィルがイギリスに上陸した日の日誌のことばと、かなりの程度重複する。主人公イスラエルがロンドン・ブリッジの上に立った日(11月5日)は、メルヴィルがイギリスに上陸した日であり、しかもその日は月曜日であった。ガイ・ホークス記念日(ガイ・ホークス火薬陰謀事件記念日)である。その上、章題として使われた「地獄の街」というダンテの『神曲』のことばも、同じように日誌で言及される。ロンドン訪問第一日目の日誌には、次のようなことばが記される。

*Friday Nov 9<sup>th</sup>* ....While on one of the Bridges, the thought struck me again that a fine thing might be written about a Blue Monday in November London--a city of Dis (Dante's) clouds of smoke--the damned &c--coal barges--coaly waters ... &c&c&c.... (14)

ロンドン描写は『イスラエル・ポッター』がはじめてではない。訪問前に出版された『レッドバーン』でも描かれている。ただしこの描写は、イギリスの書評子の厳しい評価を受けていた。作者の「空想(fancy)」と「想像力(imagination)」を好意的に受けとめてくれるものもあったが、ロンドン描写に関しては、「二流劇場のメロドラマ並み」であり、「メルヴィル氏はなぜ海を捨てるのか。海こそ彼の世界ではないか」というものであった(Parker, 667)。厳しい評価はやむを得ないところもある。10年前にはじめてイギリスを訪問した時は、ニューヨークトリバプールの間を商船で往復しただけであり、多少とも現実に体験したのは、ロン

ドンではなく、リバプールであった。『レッドバーン』のロンドン描写は、資料に基づく描写であり、おそらくこれが書評子に違和感を与えることになった。

今回の旅でメルヴィルは作家として素材を蒐集することをかなり意識している。「これから何かいいものが作れそうだ」とギルドホール訪問のときに記したことばは、その一例である。「11月のロンドンのブルーマンディについて何かいいものが書けそうだ」という、上に引用したことばも、これを裏付ける。ラトランド公爵の招待を辞退せざるを得なくなったときも、「素材(material)を手に入れる機会をなくすこと」(12月16日)を、何よりも悔やんでいる。

後にメルヴィルは、講演の中で、旅を楽しむための必要条件について語っている。それによるとこの条件は、旅をする当の本人が「屈託のない若者」で、「優しさ(geniality)」と「想像力(imagination)」に恵まれていることである(Sealts、182)。ロンドンを訪ねたメルヴィルが、はたしてこの条件をすべて満たしていたかどうかは定かではない。特定の人物への嫌悪感や率直な軽蔑感が、日誌の中に見られないわけではない。しかし、こと「想像力」に関しては、これを保証する第三者の証言がある。旅の連れアドラーがダイキंकに送った手紙である。これによるとメルヴィルは、蒐集した素材を同化し(assimilate)、これを美しい「キマイラ(chimaeras)」に作り上げる本能的な「想像力(imagination)」を持ち合わせている(Metcalf、73)。

帰国後の創作活動をみると、この指摘がきわめて正確であることがわかる。『イスラエル・ポッター』のロンドン描写もその例に漏れないし、ギルドホールで目にした異様な光景も、メルヴィルの手に掛かるとやはりキマイラの変貌をとげる。短編「貧者のブディングと富者のパンくず」(1856)は、時代が1814年に設定される。語り手「わたし」はこの年、アメリカの清貧の木こりの生活を目にした後、イギリスへ渡る。そのイギリスのロンドンで「わたし」が目にしたのは、前日ギルドホールで行われた祝宴の残り物に群がる貧者の群であった。この姿に、新世界と旧世界の「愛(チャリティ)」の落差を見る、というのがこの短編の結構である。ロンドン体験が素材となっていることは疑うべくもない。旧世界に向かう「わたし」の姿には、アメリカの若き作家メルヴィルの姿が重なる。

パリのクリュニー館(ホテル・ド・クリュニー)を訪ねた時の思い出もキマイラの変容をとげる。クリュニー館はソルボンヌの近くのローマ時代の遺跡の上に建てられたゴシック式の華麗な建造物である。ここを訪ねたメルヴィルは、そこで豊かな蒐集物を見る。美しいチャペルを眺め、地下に降りて、ローマ時代の住居跡や浴室も眺める。その日メルヴィルは「まさに私が住んでみたいと思うような家」(12月5日)と記す。

ところがこのありようが、やがてエイハブ船長の心を示す格好の比喩となる。エイハブの心に巣くう復讐心は、「深くて暗くて広大な内面の奥行き」をもち、「塔のそびえるクリュニー館の中心部から螺旋階段を下りた深いところ」にあるものである。すなわち「人間が築き上げた地上の華麗な塔、その地下にある人間の偉大さの源、そこでゆったりと髭を伸ばして座す威厳に満ちた人間の全精髓」、「古い歴史に埋もれた古代の遺物、転がるトルソの中の玉座」(41 章)である。館の構造だけでなく、語り手の口調もまた華麗である。奔放な比喩、飛翔する想像力、とてもいおうか。

もちろんこの想像力はつねにキマエラ性を発散するわけでもない。たとえばギルドホールを訪ねた日、メルヴィルはロンドン北西部を精力的に歩き回る。テンプル法学院、リンカーン法学院、スミスフィールド肉市場、カルトジオ慈恵会病院。これらを巡ってギルドホールに向かう途上、メルヴィルは、ジョンソン博士の幽霊話で知られる狭い通りコックレインを通り抜ける。日誌にも、「コックレイン(ジョンソン博士の幽霊)をぬけてスミスフィールド(西)へ」(11月10日)と記す。

ところがこのコックレインが作品中で再び姿を現す。それもきわめてわかりやすい形で現れる。海の上を幽霊のように漂う鯨の死体について、イシュメイルは、「読者よ、あなたは幽霊の存在を信じるか。コックレイン以外にも幽霊はいるのだ。ジョンソン博士よりもはるかに深いところを探る人でも、幽霊の存在を信じる人がいるのだ」(『白鯨』69 章)と語る。鯨の死体について語るのに、その手掛かりとなるのは、ロンドンで体験した三点セット、すなわち、コックレイン、幽霊、ジョンソン博士である。

あるいは『詐欺師』の一場面。詐欺師を乗せたフィデール号は、ミシシッピーの川縁のある町に立ち寄る。停泊地から陸に向かうためには、一本の路地を通らなければならない。ところがその路地は、「幽霊が出るというロンドンのコックレインのような、どこかの街の古い要塞の洞穴のような眺め」(17 章)を呈していた。キマイラ的な変貌と言うよりも、現実体験の忠実な再現というべきかもしれない。しかし、いずれにしる素材が、新たな衣装をまとうて現れ出ていることは確かである。

このように眺めると、メルヴィルの世界は、旅を素材として、無限の広がりを見せる。その具体例は枚挙にいとまがない。水兵たちの見守る中、朝日を受けて吊られていく『ビリー・バッド』(1924)の若者ビリーの姿には、万を越えるロンドン市民の環視の中で、無惨にも吊られていった二人の罪人の絞首刑のシーンが重なるかもしれない。処理中の鯨の頭とともに海に落ちたタシュテゴーが、クイ



ークエッグによって危うく一命を救われるの姿（『白鯨』78章）には、手をこまねいて見ている船客の前で、大西洋の波間に消えていった自殺者の姿も見え隠れする。

約4ヶ月という短い旅ではあったが、想像力の母胎となる体験は、それこそ無限であったというほかない。

### おわりに

ことばの使い方はしばしばそれを使う人を規定する。『詐欺師』の語り手によると、たとえばある人物を形容する際、「ほんとに変わった奴だ（クワイト・アン・オリジナル）」ということばを口にする、口にする当のその人は、学のない若者か、旅慣れしていない人間ということになる。少なくとも「グランド・ツアーを体験した者」（44章）ではない。グランド・ツアーの体験者は、このような無骨な言い回し方はしないはずである。

この言の信憑性はともかく、イギリスの上流階級でかつてひろく行われたグランド・ツアーは、次代を担う若者の教養の完成を目指す旅であった。大陸に向けて旅に出ることは、世界を知ることであり、同時にこれは、人格を磨き、教養を身につけ、大人になることでもあった。メルヴィルの旅はもちろんグランド・ツアーではない。なるほどアメリカからイギリスへ、そして大陸へと向かうベクトルは、その方向を示してはいる。しかしグランド・ツアーと呼ぶにはいかにも小振りに過ぎるし、時間的にも、あまりにも短い。ロンドン、パリ、ブリュッセル、ケルン、ラインという滞在地も、学ぶべき大陸を代表する空間としては、限定的に過ぎる。

ただし、作家の旅、それも新世界アメリカの駆け出しの若い作家の旅、という視点に立つと、必ずしもこの旅は小振りなものとは思われない。むしろグランド・ツアーに近い、というべきかもしれない。帰国後メルヴィルは、大作『白鯨』をはじめとして、多くの作品を紡ぎ出す。その作品は必ずしも高い評価を得ることはなかった。しかし作品中には、日誌に記された体験や見聞が、多彩なかたちでちりばめられる。小振りな旅は、稔りを約束する豊かな旅でもあった。

パリ滞在の折、メルヴィルはニューヨークの友人オーガスタス・ガードナーの勧めた宿を選んでいる(Parker, 680)。この友人は、渡英前にメルヴィルも読んだと思われるパリ案内書『古酒と新しい瓶』（1848）の著者でもあった。この書名にならうなら、さしずめメルヴィルの旅は、あたらしい革袋に古い酒を注ぐ旅、旧世界の素材を新世界の想像力で醸成する中身の濃い旅であった。

## 注

1 Harrison Hayford, et al., eds., *Journals* (Evanston and Chicago: Northwestern UP and the Newberry Library, 1989), p. 12. テキストはこの版による。カッコ内の数字は頁数を示す。

2 Howard C. Horsford, et al., “ Editorial Appendix,” *Journals*, pp. 628-9.

3 Elizabeth Renker, “ Herman Melville, Wife Beating, and the Written Page,” *American Literature*, Vol.66, No.1 (March 1994), pp. 123-50.

4 Dennis Berthold, “ The Astor Place Riots and Melville’s ‘ The Two Temples’,” *American Literature*, Vol.71, No.3 (September 1999), pp. 431-60.

## 参考文献

Hayford, Harrison, et al., eds. *Journals*. Evanston and Chicago: Northwestern UP and the Newberry Library, 1989.

Metcalf, Eleanor Melville. *Herman Melville: Cycle and Epicycle*. Westport: Greenwood Press, 1970.

Parker, Hershel. *Herman Melville: A Biography, Volume I, 1819-1851*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1996.

Sealts, Jr., Merton M. *Melville as Lecturer*. Cambridge: Harvard UP, 1957.  
福田陸太郎（編著）『アメリカ文学思潮史』（中教出版、1975）。

（岩手大学教育学部英語教育講座）